



彩の国  
埼玉県

ダイジェスト版

令和元年度 総合教育センター研究報告書 第416号



埼玉県マスコット  
「コバトン」

# 児童生徒が主体的に取り組む環境教育

埼玉県立総合教育センター江南支所 農業教育・環境教育推進担当

## ア はじめに

現在は、地球温暖化をはじめとした様々な環境問題が密接に関係しており、対応が急務になっている。これらの問題を解決するためには、地球規模での持続可能な開発のための教育（ESD）や持続可能な開発目標（SDGs）への取り組みが不可欠である。また、新学習指導要領に ESD の理念が反映されており、各学校においては、環境教育への積極的な取組が求められている。

## イ 研究の目的

アクティブラーニングの視点を踏まえ、子供たち一人一人が主体的に取り組む環境教育について、学校での実践を促進するための指導法の研究、開発を進めることを目的としている。

## ウ 研究の内容

### （1）調査研究の取組

研究の期間を平成30年度・令和元年度の2か年とし、研究協力員6名（小、中、高等学校教諭各2名）を委嘱し、次のとおり実施する。

#### 平成30年度

- ①学識経験者による基調講演（第1回調査研究 6月19日）
- ②アクティブラーニング、体験活動等指導方法の研究  
（第2回調査研究 9月26日）
- ③学習指導案の検討、アンケート分析  
（第3回調査研究 11月30日）



〔第3回調査研究 話し合い〕

#### 令和元年度

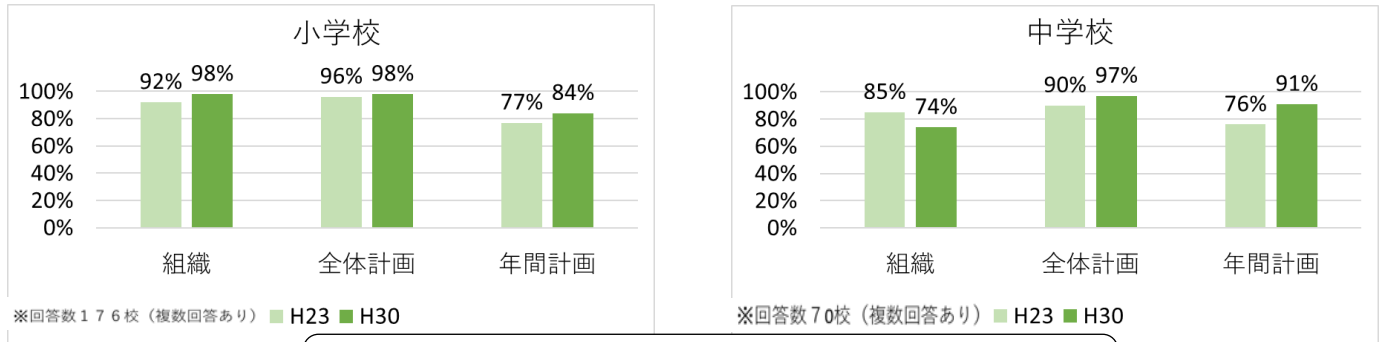
- ①前年のアンケート結果や検討結果をもとに、子供たちが主体的に取り組む授業の在り方を  
検証・問題点の整理を行う。（第1回調査研究 6月25日）
- ②学識経験者による講演（指導主事研修会 8月26日）
- ③授業研究会 会場：熊谷市立佐谷田小学校  
（第2回調査研究 10月15日）
- ④指導を実践、実践事例集を作成する。  
（第3回調査研究 11月29日）



〔第2回 研究授業〕

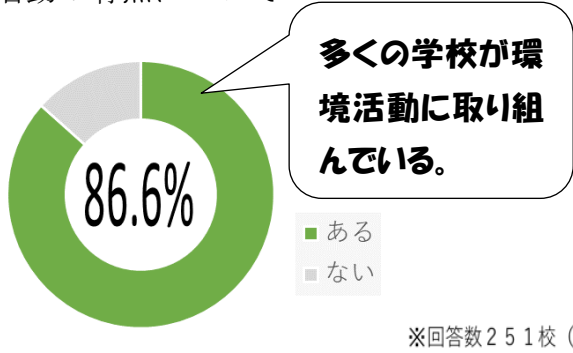
(2) 主なアンケート分析

①環境教育への組織的な取組について（校務分掌、全体計画、年間指導計画）

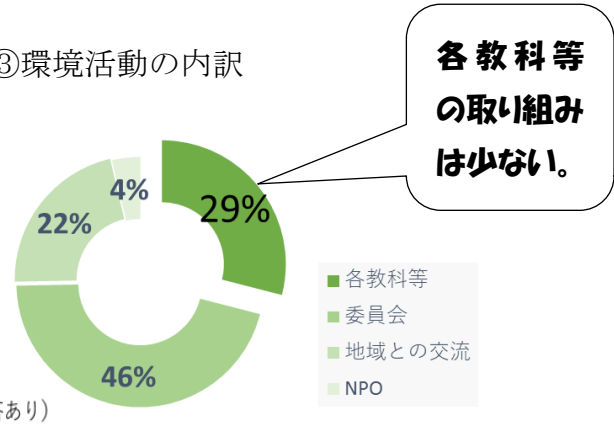


**校務分掌、教育計画への位置づけが明確になっている。**

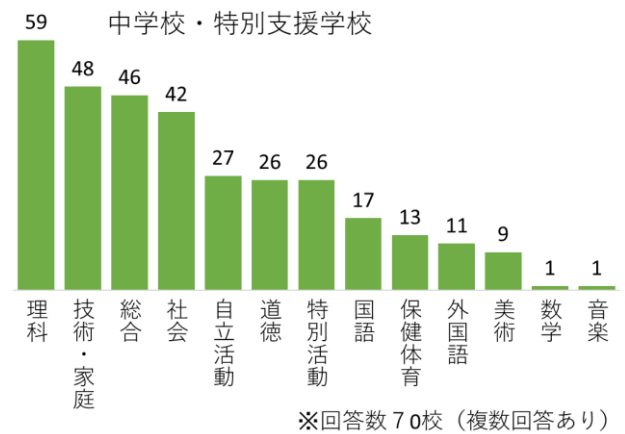
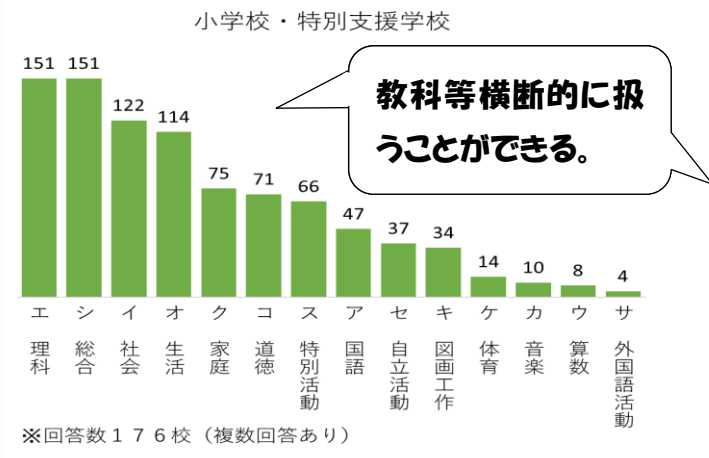
②環境活動の有無について



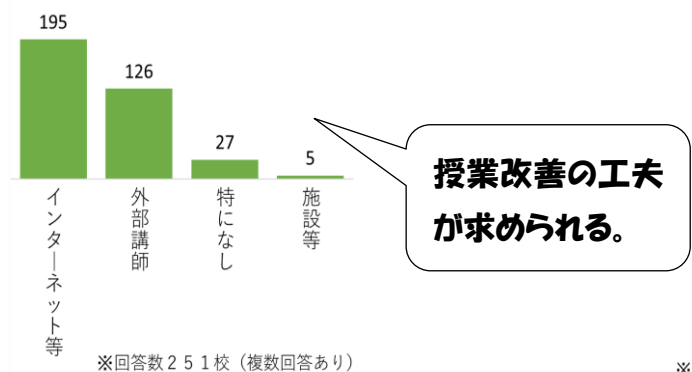
③環境活動の内訳



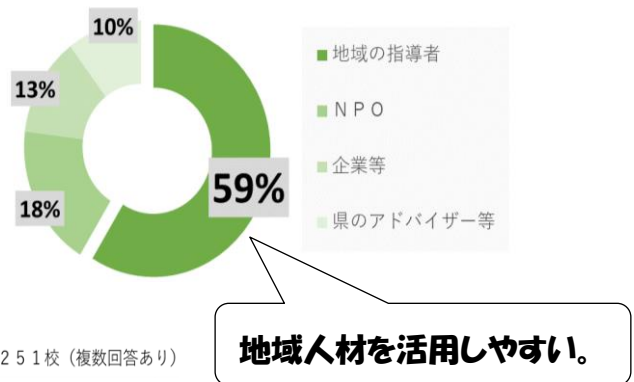
④環境教育を取り組んだ教科等（小学校・特別支援学校）



⑤環境教育の学習で活用しているもの



⑥外部講師の内訳について



(3) 方策

- ①指導計画の中に「教科等横断的な視点」「家庭、地域社会等と連携」「体験活動の重視」を入れていく。
- ②本時の指導の中に「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れていく。

(4) 主な事例1： 所沢市立宮前小学校第2学年 生活科単元計画

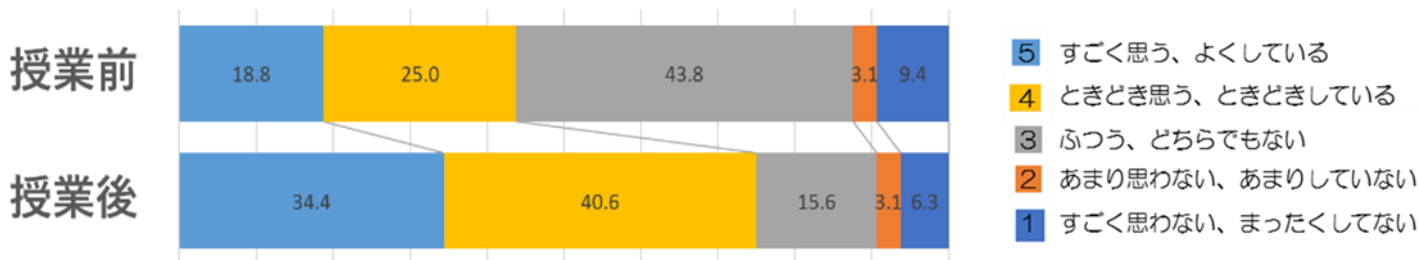
①単元名：『みやまえ2年生モールでお店をひらこう！』

②指導計画

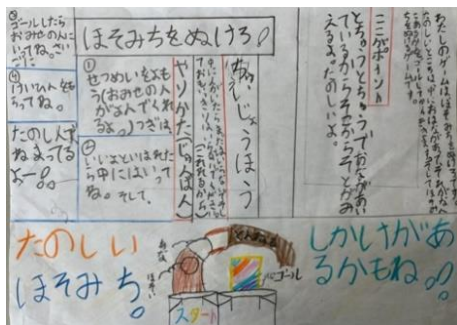
指導計画の特記事項	内 容
教科等横断的な視点	国語科「せつめいのしかたに気をつけて読もう」を活用する。
家庭、地域社会等と連携	地域のお店を見学しアドバイスを受ける。
体験活動の重視	学んできた生活科の体験活動を統合しながら意味づけを行う。
主体的・対話的で 深い学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対話的な学び→意見をホワイトボードに貼って可視化させ一人一人の考えを共有、整理する。</li> <li>・深い学び→「残す・捨てる」の基準を決め環境保護について話し合い考えさせていく。</li> </ul>

③授業前後のアンケート結果と分析

すすんで、しぜんをまもろうとしたりしている



本単元では、実際に再利用できるモノを分けることで、例えば「段ボールをもっと再利用しよう」という意識が強くなった。さらに、アンケート結果には反映されないものの、実際の活動の中では、来年の1年生に段ボールを引き継ぐにあたって教材室に大きさごとに分けて収納する子供たちの姿があり、それはすなわち、「どのような段ボールなら再利用しやすいか」という資源の再利用にまで子供たちは意識を向けていたと言える。



〔国語科の学習を活用〕



〔家庭との連携〕



〔体験活動の重視〕

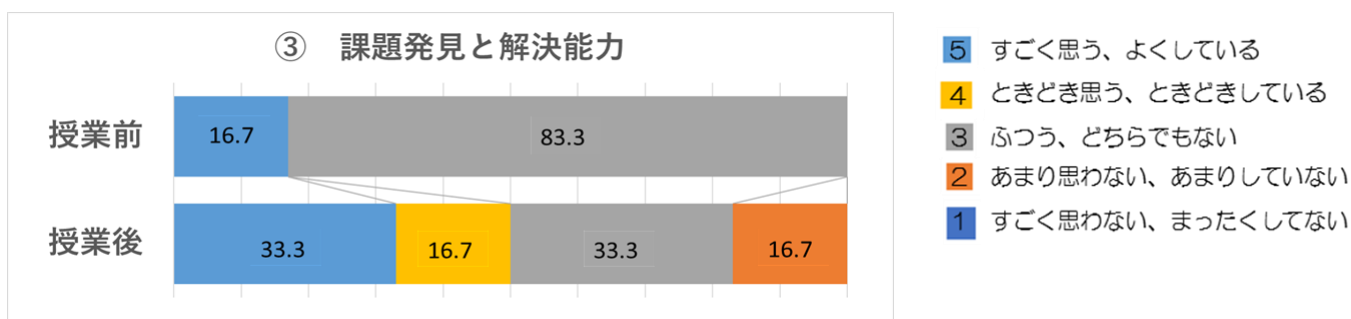
主な事例 2 : 埼玉県立寄居城北高等学校第 3 学年 (学校選択) 環境単元計画

①単元名 : 『社会と環境』

②指導計画

指導計画の特記事項	内 容
教科等横断的な視点	現代社会「国際社会の動向と日本の果たすべき役割」 家庭科「ライフスタイルと環境」
家庭、地域社会等と連携	国連のスピーチを足掛かりに、自然環境の現状を理解し、地域での持続可能な社会をイメージさせる。
体験活動の重視	短い言葉で、人にわかりやすく伝えるポスターを作成する。
主体的・対話的で 深い学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的な学び→同年代のグretaさんの演説内容を、日本語で読み理解させ関心をもたせる</li> <li>深い学び→エキスパート活動を通して、資料を読みらせる。</li> </ul>

③授業前後のアンケート結果と分析



選択科目を消極的な理由で選んでいた生徒が、環境問題に対して、自分ができることは何かを主体的に考え、自分自身の問題として捉えるきっかけとなる授業になった。②が増加した理由は、学習を通して自己解決するには現実とのギャップがある事を感じ、自己評価が下がったと推測される。

## エ おわりに

### (1) 成果

- 教科等横断的に取り組むことで、既習事項を活用し児童生徒の持っている力を総合的に働かせながら課題に取り組む姿が見られた。
- 体験活動を計画に取り込むことで、興味関心を持ちながら学習を進めることができ、児童生徒の感性に直接訴え実感を伴うことにも有効であった。
- 指導計画を工夫したことで、環境に対する豊かな感受性・見方や考え方・実践力それぞれの向上が、授業前後のアンケート結果からわかった。

### (2) 課題

- 環境教育を組織的に取り組めるようにするため、教員の連携のあり方を含めたカリキュラムマネジメントをより一層整えていく必要がある。
- 授業中や授業直後だけでなく、長い期間で児童生徒の変容を見取り、地道に環境教育に取り組むことが求められる。

※研究報告書は、埼玉県立総合教育センターのホームページ (<http://www.center.spec.ed.jp/>) から閲覧できます。